# 地域の情報化について（2）

## －デジカメと地域づくり－

別府大学短期大学部
梶　原　　博

## I　はじめに

「地域づくりとは、人づくりのこと」だと言われる。あるいは、「地域づくりにおける情報ネットワークとは、結局、人的ネットワークのこと」とも言われる。それはもちろん正しい。だが、地域づくりにおいて、コンピュータは、単なる道具としてだけではなく、地域づくりや人づくりのあり方に影響を与えるような力を秘めているのではないか。そういう気持ちが、この文と前後する一連の小論のテーマとなっているのだが、今回のテーマは、デジカメと地域づくりである。

デジカメ（デジタルカメラ）は、コンピュータそのものではなく、コンピュータの周辺機器の一種ではある。しかし現在のコンピュータ（というよりパソコン）は、マルチメディア処理機能と検索機能を含んだネットワーク機能が組み込まれた、統合的な情報処理システムとなっている。画像・音声の入力ができて、インターネットにつながれた使い方をされるのが当たり前になり、デジカメはキーボードと同じような、ごく普通のデータ入力装置の一つとなった。みんながデジカメやビデオカメラをつなぐために、あるいはインターネットで遊んだり情報検索をするためにコンピュータを買うという、ようやく、道具としては当たり前の使われ方をされるようになったとも言える。そういう時代におけるデジカメを考える。

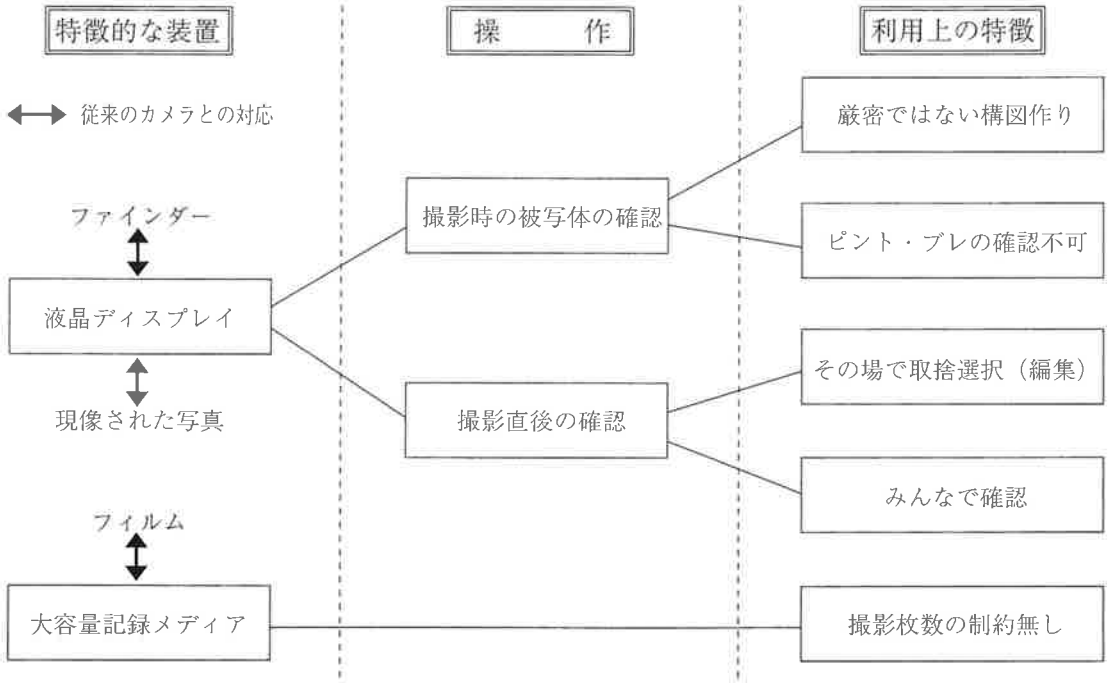
## II　デジカメ撮影の特徴

デジタルカメラ（デジカメ）の機構的な特徴と、それに影響される操作や撮り方の影響をまとめてみたのが下の図である。

こうしたデジカメの撮影操作上の特徴は、写真の撮り方そのものにも大きな影響を与えるだろう。それは、

(1) 1枚の写真の「重さ」が軽くなる。
(2) 写真撮影が共同作業の性格をもつようになる。

ということだ。



詳しいことは、後でもう一度考えたいが、(2)について少し補足しておこう。デジカメの使われ方、ユーザー層を考えると、写真好きの個人が撮影のための撮影を行なうよりも、みんなでレジャーなどに出かけたときに使われることが多い。液晶ディスプレイで撮影結果を確認するときも、当然、みんなで覗き込みながらわいわいと楽しむ。人物写真の場合は、撮った人と撮られる人は次から次に入れ替わるし、風景写真の場合も、前に撮った人の結果をみんなで楽しみながら、撮り手が入れ替わっていくことが多い。こうして撮られた一連の写真は、伝言ゲームのように前の撮影者の雰囲気がフィードバックされる。(2) はこうした現象を意味している。

このような傾向は、少し前にはやったプリクラにおいてもすでに見られる傾向だが、そうした傾向がデジカメではさらにはっきりしてくる。プリクラの印刷画面の大きさが非常に小さく、被写体がもっぱら顔写真に限られていたことに比べると、デジカメでは従来の撮影被写体がそっくりそのまま、こうした傾向のもとに撮影されるようになるのだ。

このような特徴をもつデジカメの撮影方法は、「地域づくりと情報化」とどのように関係してくるというのか。

## Ⅲ「地域づくり」

### 地域づくりは、差異を探す運動

私が、デジカメの話を「地域づくりと情報化」と結びつけようとしているのは、まず、現在の地域づくりが次のような段階に入っているからだ。

産業振興や生活環境の再建・保全、あるいは名所・イベント作りの段階を経て、地域づくりとは「地域について、何事か考え、その考えを、地域の内と外とで共有すること」を意味するようになっている。このような地域づくりはまた、人の手よりも時の力により多くを負う歴史や伝統とは微妙に異なる、より人為的な「物語」という付加価値を地域に与える作業でもある。それは、共同体固有の歴史をはぎとり画一化していく、近代化過程への反動でもある。

簡単に言えば、単に生活上の住み良さを追求するのではなく、単に面白い施設やイベントがあるのでもなく、何らかのオリジナルティとしての「地域らしさ」が求められているということだ。はやりの「自分探し」の地域版である。

ところが皮肉なことに、近代化の過程を通過してしまった現代の地域は、歴史や場所などのオリジナリティが剥ぎ取られてしまっている。

第一に、日常生活について、どこに住もうが大差ないという現実がある。

第二に、等しくすべての人が学校の教科書で地理や歴史を学ぶようになって、地域に固有な地理や歴史も、他の地域の地理や歴史と同じように「知識」として受け入れてしまう。

筆者が地域活動や地域研究の際にお世話になっている町にしても、地理的には「ベッドタウンとして人口増大中の中山間地域。ただし、比較的大規模の河川とそれに伴う稲作に適したそれなりの平地をもち、かつては弥生時代の集落もあった」と言えば、ほぼそれで特徴を言い尽くしているし、歴史についても同じように類型化できてしまう。

地域づくりを行なうときに、別に自分の地域を類型化する必要はないはずなのだが、「地域づくり」という活動がもともと、普遍的な「より良い生活」を求める作業から始まっているから、最初から他の地域との比較から始まることになる。そうなると、それほど意味のある違いなど、この小さな国の中で見つけられるはずもない。

たとえ、ある地域に唯一無二のユニークな点があったとしても、現在全国で展開されている「地域づくり」運動は、そうしたユニークさをただちに解消させていく。

例えば旧都である京都は、何となくユニークな歴史や文化をもっているような気がするが、同時に小京都と呼ばれる日本全国、京都とは歴史も産業基盤も異なる町まちの総本山となっている。住民の意識はともかく、「地域づくり」という運動の中では、京都は京都的ということで一括され、「違うけれど同じ」であることが重要なポイントになる。

もちろん、それぞれの町で活動している人々は、自分の町の独自性を十分考えながら、その独自性を生かした町づくりをやっているのに違いない。しかし、小京都であるということ、京都と同じであることを、様々な意味で出発点として、共通の認識としていることも確かだろう。

そういう中での、現在の地域づくりなのである。

地域づくりにも様々な経緯・パターンがあって、その中には、福祉に関わるたいていの問題がそうであるように、地域の独自性とはそれほど関係がないように見えるものもあるだろうが、現在進められている地域づくりの多くは、街並み保存運動を代表とするような、独自性・オリジナリティが鍵となっている。そうした独自性が地理的歴史的に実体としては（少なくとも日本という国レベルでは）あり得ないのならば、それは新たに作り出すしかない。それはまず、「ここに独自性がありますよ」と宣言することから始まる。そしてそれを、地域の内外から認めてもらう。内だけではなく外からも認めてもらわなければならないから、この独自性は普遍的な、つまり誰もが認める、「どこにでもある独自性」である。これが物語である*。

＊「物語」については様々な議論が必要だが、象徴的な面白い例を一つ紹介する。福岡県福岡市の吉塚・千代地区の再開発時の策定プランを作るときに、再開発地域が駅をはさんで二つの楕円形がつながった形になっているところから、これを蝶に見立ててバタフライ計画という名称を付けたところ、地域の内外からの参加が急に増えたそうである。このことを取り上げた論者は「絵本を作るような地域づくり」という考え方を重視していて、事例紹介のこの項の目次も「蝶の舞う町づくり」となっているのだが、これはイメージを共有させる力としての「物語」の性格を物語る一つの極端な例であろう。

先ほどの小京都の話でいくなら、どんな町でも「小京都」であると宣言し、その宣言に納得してもらえさえすれば、「小京都」として認定されることになる。「京都的なものとは何か」ということは、とりあえず問題ではない。共通の認定だけが重要なのだ。後は、宣言できると思える何かを、見つけられるかどうかにかかっている。

見つけ、宣言し、認定する。現在の地域づくりの特徴であるこれらの各過程で、コンピュータ・ネットワークやマルチメディア*を使った情報化過程が大きな意味を持ってくる、というのが先取りした結論である。

＊地域づくりには、「小京都」の例のように、地域のイメージ＝「物語」0を作り上げることを核にして成立する場合だけではなく、例えば阪神大震災の後の神戸の町づくりのように、生活上の必要に迫られて行われた、いわば「地味な」地域づくりもある。だが、この場合でも、神戸の地域活動がある程度成功し、ケーススタディとして全国に知れ渡るようになる背景として、「もともと神戸はそういう、地域のつながりの強い町だったのです」と町の人が語ってくれるような何か、例えば、日本の生協運動のメッカであるというような物語があったのだということを見落とすことはできない。
あるいは、地域計画の策定作業のほとんどを行政から住民に委譲し、日経新聞版「住民サービス番付」のトップの地位に何度もついている東京都三鷹市の場合でも、「下水道整備は文化国家の証」であると宣言して下水道普及率100%を達成したかつての市長の物語抜きにしては語れない。

## Ⅳ 「風景」－地域づくりの素材

町づくりのスローガン、物語のタイトル作りには、ある種の新奇性、あるいはミスマッチが必要となる。小京都の話を例にするならば、いかにも小京都らしい町が「わが町は小京都」と言ってもあまりインパクトはない。だいたい、そんな町は黙っていても小京都として認知されているだろう。認知されていて「受けて」いればいいし、「受けて」いなければ、面白くない町だということだ。

「小京都」という呼び名を「公式」に名乗るためには、「全国京都会議」に登録しなければならない（？）が、登録基準は、とにかく「その土地の景観、街並み、自然、食べ物、工芸品などが京都と密接な繋がりを持」っていることだそうだ。別に異議を唱えるわけではないが、鹿児島県の知覧町は、中心部に武家屋敷群が残っており、古くから「薩摩の小京都」と呼ばれて、年間100万人の観光客が訪れているという理由（だけ）で、全国京都会議に登録されている。

誰もが小京都と考えるところが公認されることの効果は、もちろん大きいだろうが、「え、ここが京都と関係があるの」と驚くようなところが、「なるほど、そうだな」と思わせるものもまた、インパクトは強いだろう。何をもって小京都とす

るかという基準は、少なくとも前述の規定をみる限り、あってなきがごときであるから、小京都を宣言できるかどうかは、ひとえに自分の町に京都らしさを「発見」できるか（あるいは、「でっち上げる」か）どうかにかかっていると言っても良い。

ある結論を引き出すために、意外な理由を見つける技術は、ＫＪ法などの様々な発想法として昔から紹介され続けてきたが、共通するポイントは

**とにかく収集し、**
**あれこれと組み合わせる**

点であろう。地域づくりのスローガンを引き出す場合には、収集するのはその地域の歴史・文化・景観などであるが、そういうものの総体＝象徴として、「風景」を考えることができる*。風景を収集することは、地域づくりの基本である。

＊もちろん、ここで言う「風景」とは、自然の「風景」だけではない。知らない土地をただ単に通過するだけでも、歴史性や人間性を含む何らかの感触を持たないということはほとんどないが、そうした感触を持つ根拠は目に映る「風景」しかないはずだから（正確には音と匂いも含むが）、その意味で、「風景」に地域が集約されると言っても言い過ぎではない。「田んぼ」が自然の風景ではなく、歴史的な、人為的な風景であるということも、最近では多くの人が言うところである。「風景」を意識的に構築・再構築すると「景観」になる。

「風景」と言っても、言葉で表された風景と画像で表された風景とがあり、画像で表された風景にも、手書きでスケッチされた風景と写真で写した風景がある。また、収集した風景を組み合わせる方法にもいろいろある。そうした様々な風景の収集・編集手段の中で、ここで問題にするのは、「デジカメ写真で風景を写す」という方法だ。

コンピュータの入力装置でもあるデジカメで風景を写した＝撮った場合と、そうでない場合とで、何か違いがあるのだろうか。集めた風景を、模造紙の上に並べて編集するのと、そうでない場合とで、何か違いがあるのだろうか。

## V 「写真を撮る」ということ

### ピントの合っている写真、合っていない写真

この原稿の冒頭で、デジカメ写真の特徴、とくに撮影スタイルに与える影響について述べた。それを踏まえて、下の2枚の写真を見比べてもらいたい。女の子の写真は、『デジカメ時代のスナップショット写真術』（大西みつぐ、平凡社新書、2002年）という新書の中の作例、もう一枚のよくわからないパイプの写真は、「文化を彫る」というタイトルで筆者が本学の公開講座で使った学生の撮った写真（やはりデジカメで撮った）である。これは、農業用水をくみ出すポンプに付属するパイプを写している。

どちらもいわゆるスナップ写真ではあるが、私の目から見ると、撮影技術は別として、新書の作例はやはり「芸術写真」である。どこが芸術写真かというと、端的には「ピントと構図が命」の写真だからである。この写真は、おそらくピントが合っていなければ、「良くない」あるいは「美しくない」。それに対して、学生の作例は、そんなものは関係ない。

### 写真と主題性

この場合のピントや構図は、主題性を意味している。「何を撮るのか、撮りたいのか」「どう撮るのか」の問題である。

大西氏の写真の中の彼女は、誰が見てもこの写真のテーマである。この写真を見る人は、そこに込められた撮影者の確かな思いを感じることができる。そのように感じることができるためには、どんな微妙な表情もないがしろにはできない。だからピントが重要になる。さらに言えば、背後の外の風景は正直言ってややうるさいと言えなくもない。客船の窓枠であることが分かることによって、この写真が旅の途中のワンシーンであり、彼女が疲れて眠っていること、そしてこの旅がおそらく家族旅行であろうことが想像され、そうした撮影背景がいっそうの味わいをこの写真に与えているのではあるが（そして、こうした要素を大切にしようというのが大西氏の意図なのだが）、そんなものがなくても彼女の表情は十分雄弁である。テーマである彼女の姿と背景とのバランスを考えると、構図が重要になる。逆にいえば、彼女がテーマとしてしっかりと立っているから、構図が重要になる。

それに対する学生の写真であるが、パイプしか写っていない以上、この写真の主題はパイプのはずである。そうなのだが、それを撮らずにはいられないという必然性があったかどうか、どうも疑わしい。要は「何となく面白そうだから」撮ったのであって、「面白い」と思った理屈（＝論理）を無理やり付けることもできるのだろうが、ピントを合わせないと見えてこないような理屈ではなさそうだ。

それでも、ひょっとしたらかなりの人が、この写真を「何となく、面白い」と思ってくれるのではないか。だとしたらやはり理屈はあるのだが、それでも理屈がついたからと言って、かの写真の面白さが増すとも思えない。

### テーマのない写真

なぜテーマのない写真が成立しているのだろうか。その理由のかなりが、デジカメ写真の特徴から来ているのではないか。

この写真を撮ったのは、この地域で育った二人の学生である。一人はビデオカメラを持ち、交互に機材を交換しながら、互いの撮影を見ながら撮った。まさに、先ほど述べた、共同作業としての撮影である。

またこの１枚は、町の風景を撮ろうということだけ申し付けて、気のおもむくままの撮影行の中で撮った、連続写真の中の１枚である。１枚の「重さ」が軽くテーマ性が希薄なのも当然である。それでも、当事者（撮影者とその周りの人、そして、公開講座に来てくれた挾間町の人）には十分面白く、楽しい。ある種パターン化されたスナップだが、挾間町という曖昧なテーマを曖昧に感じさせる、それなりにユニークな写真になったのは、１枚の写真のテーマ性が希薄だからこそとも言える。

デジカメ写真のもつこのテーマ性の希薄さが、実は、地域づくりと結びつく。

ここから少し、デジカメの話から離れて、「テーマ性のなさ」について考えてみたい。

## Ⅵ 地域とテーマ性　主語世界から述語世界へ

「地域づくりは差異を探す過程」であると述べた。地域の独自性を見つけ、宣言し、認定してもらう運動である。

同時に、そのような差異は、近代社会においてはない、とも述べた。再三登場する挾間町にも興味を引く歴史や場所はあり、住民にとってそれなりに意味や楽しみを与えてくれるのだが、地域づくりという局面においては、今のところほとんど役に立っていない。小京都の例のように、むしろ差異を規格化・物語化してしまうところに、現在の地域づくりの本質があるのに対して、挾間町では差異にすらなっていない。

したがって、差異のないところに差異を発見し、宣言し・認定する方法論が重要な課題になるわけだが、実際にはなかなか難しいことで、みんな悩んでいる。最大の困難は取り組む人の問題かもしれないが、人の問題の大きさにかまけて、地域づくりの方法論について十分な検討が行われていないことも大きな問題である。

デジカメ問題の締めくくりとして、「地域づくりの方法論としての差異探し」について考えてみたい。

なお、ここでの議論のかなりの部分は、『情報技術と経済文化』（今井賢一編著、NTT出版、2002年）に負っていることを予め申し上げておきたい。

## 主語的世界

再び挾間町を例に取り上げる。

繰り返しになるが、挾間町は「ベッドタウンとして人口増大中の中山間地域。ただし、比較的大規模の河川とそれに伴う稲作に適したそれなりの平地をもち、かつては弥生時代の集落もあった」町である。

この定義には、いくつかの文が含まれている。例えば、「挾間町はベッドタウンである」。この文には「ベッドタウンとして人口増大中の」という文言が含まれているが、この文言を独立して取り上げると「ベッドダウンは人口増大地域である（ことが多い）」という文になる。同様に、「挾間町は中山間地域である」という定義には、「中山間地域とは、○○である」という定義文が、明示的に、あるいは暗示的に組み合わされる。

このように、無数の定義文を組み合わせながら、我々は考え、イメージする。このことが、地域のなかに新しい差異を作り出そうとする作業を妨害している。

「中山間地域とは、川がながれ、山があり、田んぼがある」、だから、川の駅を作り、ふれあい農園を作る。どこもやっている、したがって、差異にならない。仮に当座はうまくいっても、そこここにあふれる類似性に埋没して、よほどのことがない限り、たちまち立ち行かなくなる。

このように我々の発想が貧困になるのは、「中山間地域」という言葉を発した瞬間に、「中山間地域とは、○○である」という定義文が無意識のうちに私たちを縛り付けているからである。固定概念が邪魔をすると言った方が分かりやすいかもしれない。差異探しは、このような定義文を構成する、「○○は××」であるという、名詞とその説明＝「属性」との強固な関係から自由になるところから始まる。

## 述語的世界

「中山間地域」という言葉を使うときには、「中山間地域とは○○である」「中山間地域とは××である」「中山間地域とは△△である」・・・という無数の定義文が脳裏に浮かぶように、私たちは躾られる。学習することの大半は、こうした定義文を数多く貯め込み、定義されている事物についての理解を深め、それに基づいて対応する術を身につけることに費やされる。定義された事物に注目して生きる世界を主語的世界と、さしあたり名づける。一つの事物について無数の定義文をつなげるものは、共通する主語だからだ。

主語的世界は、理解の世界であり、抽象化された世界であり、論理的な世界でもあり、パターンの世界でもある。「例えば、机の上に二つのリンゴA・Bがあるとき、われわれはリンゴとはいかなるものかという類概念をもっているから、両者は同一視される」。これは今井氏の著作からの引用であるが、こうした類型化の思考方法が、一方で社会や文化の発達を可能にしながらも、現在の地域づくりの障害になっているわけだ。

だが、私たちは主語的世界にだけ生きているのではない。「腹が減った」「ご飯がおいしい」「もう眠い」とかいう文では、主語はどうでもよかったり、省略されたりしていて、「減った（本当は「腹」は主語ではないが）」「おいしい」「眠い」という述語が文の中心になっている。主に日常の生活感覚と密着しているようなこの世界を「述語的世界」と名づける。

差異の発見、あるいは新しい発想には、この述語的世界観が大きな役割を果たす。「例えば、リンゴは丸い、乳房は丸い、だからリンゴは乳房である」と進む思考は、従来的な類型化とは異なる発想を可能にする。

二つの思考方法の違いは、単なる発想方法の違いだけではない。名詞を中心とする主語が、様々な類型化・抽象化を経た観念として使われるのに対して、述語に使われるものは、「眠い」「おいしい」「丸い」というように、日常的な感覚と結びついている。社会や文化の発展の中で、主語に使われる名詞の数が増えていくほどには、日常生活で使われる述語の種類は増えない。こうした述語世界においては、（主語世界の観点では）異質なものが一つにまとめられるだけでなく、述語世界を共有しやすいという特徴を持つ。このことについて、今井氏は面白い例を取り上げているので、やや長くなるが、そのまま引用しよう。

国際会議の場などで、自分の意見を主張し、主語的な論理を守ろうとするので、意見はなかなか一致しない。…ところが、会議を休憩にして、飲み物をとろうというような時には、「疲れたから、少し休もう」ということで意見は容易に一致する。しかも、私はコーヒーです、私はジュースです、俺はビールだ、というような非論理的な言葉を使いながら一致しているのである。それは「……が私の飲みたいものである」という述語面からの一致である。

差異を発見し、認定してもらうという地域づくりの過程に対して、述語世界の一致という考え方は非常に魅力的ではないだろうか。

### 列挙の方法

新しい発想・発見をもたらす「主語的世界観から述語的世界観への転換」であるが、私たちの思考は、言語を通して行なわれるために、この世界観の転換はなかなか難しい。というのは、言語の世界の半分を構成する書き言葉が、述語的世界観を記述するのに適してないからである。面白いからといって、「地球は丸い、乳房は丸い、地球は乳房だ」という「文」を簡単に受け入れるようになっていないのは、そのせいだ。

思考の道具である言語がそうなっているのだから、仕方がないといえば仕方がないのだが、その一方で私たちは、言葉を使いながら創造を行ない続けてきたのだから、創造的思考において言葉の制約を乗り越える技術もまた、持っている。

今井氏が著作の中で紹介する、日本に昔からあった「列挙の方法」はその例の一つである。(「列挙の方法」自体は、田中優子『江戸の想像力』筑摩書房、1992年による)

「春はあけぼの」の枕草子、「…なるもの」の徒然草など、「列挙の方法」で書かれたものの共通点は、「ある事象に関連すると考えられる言葉を、因果関係を考慮することなく、単純に書き尽くしてしまうという方法である」が、文法的な特徴としては、「我々が文章のあたりまえのつなぎ方」だと思っている「接続表現」(だから、そして、しかし、等など)を使わないことである。接続詞の意味を、今井氏は次のようにまとめている。

接続詞を用いれば、ある程度複雑な論理関係を表すことを可能にするが、接続表現ぐらいでは太刀打ちできない、より複雑で多様な現実認識は切り捨てられることになる。伝達効率はよいが、そのかわり現実の捨象と限定と、論理関係への単純な還元が起こるのである。

たとえば、彼が例として引き合いにしている、

アイロン　足継　足継ぎ　編棒　編み棒　荒物　アルミ箔　糸巻　糸巻き　うちわ　団扇　煙道エンドカーラー　扇　下し金　下ろし金　カーラー　ガスライター(以下省略。『日本語語彙体系』より)

からかもし出される世界と、「日用品」あるいは「家庭用品」という言葉で観念化された世界を比べてもらいたい。(このように列挙すると、「編棒」と「編み棒」との差異すら、意味をもつ。列挙の方法には書き言葉の視覚効果すら含まれている)

### 再びデジカメの話

この列挙の方法を、言葉ではなく、視覚情報というメディアを使って行なうのが、まさにデジカメの世界なのである。

「デジカメ時代の」と断りを入れているにもかかわらず、大西氏の写真は従来の写真術、すなわち主語的世界観に基づいているように思われる。すなわち、

①主語(娘)が不可欠の構成要素である。
②唯一の主語には様々なディテール(属性)が組み合わせて、統一的なテーマ(まどみ)が表現されている。
③しかしながら、そのテーマ自体は、実は主語の中に内包されていて、写真はそれを引き出す手段でもある。

特に③については、「娘はかわいくない」「娘は愛しくない」「娘(子ども)は家族の安らぎではない」という文が、個別には成立し得ても、社会的にはほとんど受け入れられないだろうということを考えてもらいたい。この写真は主語的世界のもつ社会的制約を美につなげた作例であることが分かる。

ひるがえって、わが学生の写真である。さしあたって、この写真にはパイプが写っていて、そのパイプに結び付けて考えられる属性は何もない(ように思われる)。ただただ、「面白い」以外の属性はない。そして、この面白さは、同じようなよく訳のわからない写真が、ずらずらっと並べられることによって強化される。そして公開講座という場で「挾間町で撮りました」と宣言することで、何となく「そうですか、なるほど」ということになり、最後に「地域がテーマです」と言ってのけることで何がしかの意味が付与される。画像による列挙は、列挙という方法がもっている

> 「意味の遊び」が大きく、…「取り合わせ」や「間」や「連なり」が意味を形成していくという、論理関係とは異質な意味生成の可能性

をとことん引き出すのである。

## Ⅶ おわりに

差異の発見にとって、デジカメ撮影は、単なる一方法というだけでなく一つの方法論を秘めている。もちろん、デジカメを使わなくても、単なる思考や、討議、あるいは通常のカメラを使っても、差異の発見は行なわれるし、これまで行なわれてきた地域づくりのほとんどは、そのような手段を通じて行なわれてきている。

だが私たちは今、どの地域も「地域づくり」を行なわなくてはならない状態に、ある意味で追い込まれている。そのためにも、個人の能力や感性に最初から最後まで頼らなくてもいい、あるいはそういう能力や感性を形成していくような方法論が求められている。この方法論の体系が、今求められている情報化の課題だと私は考えている。

差異の発見の後には、宣言と認定という過程が続くのだが、この点については、今後の課題としたい。